祇園（天王祭り）について

A Study of the Gion (Tennosai)
—The Festival of the Japanese Religion—

Norio Kuribayashi

栗林宣夫

一　牛頭天王の日本渡来

私の故郷は茨城県霞ヶ浦湖畔の農村であるが、ここでは毎年七月二十日・二十一日の両日にわたって「ぎおん」といっている祭礼がある。「てんのうさま」とよぶみこしをかつぎ、時々あら〳〵しくもみ、ふえ・たいこのはやしやおどりをのせた「だし」をひきまわす単純素朴なものであった。この祭礼をなぜ「ぎおん」というのか、「てんのうさま」とはなんのことか、などと子供心に思うこともあった。やがて京都八坂神社の祭礼も祇園とよばれることを知り、この豪華で伝統のある有名な祭礼と私の村の素樸な祭りとがどうして同名なのであろうか。これらの疑問に説明を与えてくれる資料を拾っているうちに、「ぎおん」とか「てんのう様」とよぶ祭礼が各地に多いことを知り、研究というものではないがまとめてみた。しろうと考えで不明のところも多く誤解も少くないと思うので、大方の御教示をお願いしたい。

祇園といえば、京都八坂神社のそれが最も有名であるので、まず手がかりを八坂神社に求めてみたい。この神社は明治初めの神仏分離令によって祭神を牛頭天王（ごずてんのう）から素戔嗚尊（すさのおのみこと）（『日本書紀』ではこのように書き、『古事記』では須佐之男命と書き、天照大神の弟といわれる）に、社名を祇園社から八坂神社にあらためたものである。室町時代後期の作といわれる『二十二社註式』（『群書類従』巻二十二所収）には、祇園社の祭神として、中間に牛頭天皇（ママ）、号大政所、進雄尊（すさのお）垂跡。西間には、本御前　奇稲田媛（くしいなだひめ）垂跡、一名婆利（ばり）女、一名少将井。東間には、蛇毒気神竜王女、今御前。と記している。中の

間には、主神の牛頭天王、東西の間には、前と今の御前（妃のことであろう）を配祀しているという。『東海道中膝栗毛』七上は、京都の名所見物を述べ、その中で「それよりゆきゆきて祇園の社にまいる。御本社の中央は大政所牛頭天王、東の間は八王子、西の間は稲田姫」と中央に牛頭天王、東西の間に天王の子女と妃をまつってあると説明している。明治の初めまで、八坂神社は祇園社とよばれ、牛頭天王とその家族をまつっていたことは明らかである。

牛頭天王とは、インドにもとからいた神、在来神であるという。これらの在来神は仏教の普及にともなって仏教と習合し、その守護神となったと信じられた。牛頭天王も薬師如来の垂迹、祇園精舎の守護神として信仰され、仏教の東流によって中国に入って牛頭天王と漢訳された。この牛頭天王の日本渡来については諸説あるが、最も一般的となったものは、播磨の国にあらわれ、これを広峰（姫路市北方にある丘）にまつったという説である。『東海道膝栗毛』七上も、さきに引用した祇園社参詣の記事に続いて「聖武天皇の御宇、吉備大臣唐より帰朝の時、播磨の広峰に垂れ給うを崇奉（あがめたてまつ）れりといふ」と記している。『二十二社註式』も、祇園社の由来について「牛頭天皇（ママ）、初め播磨の明石浦に垂跡したるを広峰に移し、そののち北白河東光寺に移す。そののち人皇五十七代陽成院の元慶年中に感神院に移す」と説明している。広峰には現在広峰神社があるが、この神社は神仏分離令以前は広峰天王社と号し、京都八坂の祇園社の元宮、牛頭天王総本宮と称した。このような誇称のより所として、この説を広峰天王社側がつくり宣伝したものであろう。また、愛知県津島市神明町にある津島神社も前は津島天王社といい、牛頭天王をまつっていた。この社の伝える説は、欽明天皇の元年、牛頭天王は九州の対馬に降り、のち尾張の海部に移ったので、その地名も対馬と音の通ずる津島とし、嵯峨天皇の時にその祠堂をたてた、というものである。津島天王社は、八坂祇園社、広峰天王社とともに古い天王社といわれ、日本総社牛頭天王社と称している。この伝説も、その総社であることを主張する根拠として、ここの祠官らが創作したものであろう。

京都八坂祇園社の創建については諸説が多いが、[1] つぎのような史料がある。それは『二十二社註式』祇園社の条に創建についての説明があり、その中で、承平五（九三五）年六月十三日付の大政官符「応以観慶寺（かんぎょうじ）為定額寺（じょうがくじ）事」をのせている。官符は勧慶寺の位置・境内の国堂院を説明して終り方で、天神・婆利・八王子をまつる祠堂を述べ、これは山城国解（げ）のいう、貞観年中に僧円如の建てたものであると記している。この官符、その引用した山城国解は信頼できる史料と思えるので、僧円如が貞観年間に創建したという説は有力である。この天神堂はその祭神の家族からみて牛頭天王をまつる祠堂であり、天王は天神ともよばれていたようである。しかし、円如が建てる以前に、京都の八坂附近の地に天王をまつる祠堂がなかっ

たのであろうか。『二十二社註式』祇園社の条には、前述のように、天王は播磨明石の浦から広峰に移り、そののち白河東光寺、さらに天慶中に感神院に移る、とある。また承平五年の官符を述べたあとに、或いは云う、として、円如が託宣により貞観十八年八坂郷の樹下に移し奉った、とも記している。貞観のころ、疫病流行で衆人が悩んでいるのをみた円如が疫神としてあがめられていた牛頭天王の祠堂を八坂の観慶寺境内に建てた。それが勧請か分祀か、いずれにしても、これよりも古い、円如の天王祠堂のもとになったようなものがこの地方にあったのではなかろうか。

八坂祇園社創始に関する諸説の中で、斉明天皇二（六五六）年八月、来日した高麗（高句麗をいう）の副使伊利之が新羅の牛頭山に鎮座するスサノオのあらみたまを迎えてまつったという説（『八坂郷鎮座大神之記』）、天智天皇五（六六六）年十月、来日した高麗の使が八坂の地に牛頭天王の祠堂を建てたという説（『感神院牛頭天王考』）がある。これらの使が来日したことは『日本書紀』斉明記二年八月庚子の条・天智紀五年十月乙未の条に記されているが、この伝説をうらづける史料はない。しかし、斉明・天智のころ、中国に南北対立を統一した強大な隋唐の王朝が成立して朝鮮半島に圧力を加え、半島の情勢は急迫し、百済・高句麗の命運もきわまって滅亡した。このころ風雲急な本国を逃れて日本に安住の地を求めて渡来した高句麗・百済の人々も多く、これらの人々が牛頭天王信仰をもたらしたことはあり得ることではなかろうか。[2] 天王の播磨降臨説には、吉備真備が登場するが、神社仏寺の縁起には有名人物を関係させることが多い。これもその例で、真備は再三渡唐して中国の諸学問を身につけたという経歴、その能力から、天王降臨に関係させるに最もふさわしい人物であったようである。しかし日本に渡来した牛頭天王は、仏教徒の間で疫病流行を終息せしむる功力ありと信ぜられ、奈良時代にはそのための牛頭天王修法が次第にひろがるようになっていた。この点からみると、真備のころ天王が渡来したとすると、渡来の時期としてやゝ遅すぎるように思われる。

日本に渡来した牛頭天王は疫神として信仰されるようになった。この間の経緯はよく分らないが、わが国には古くから神とか霊魂のたゝりが疫病の原因となるという考えがあり、牛頭天王も疫病をもたらす神・疫神と考えられたようである。飛鳥のころから奈良時代にかけて、薬師如来に病気平癒も祈願することが行われたが、奈良時代末期には疾病流行に際しては、疫神をまつり、また読経して厲鬼の侵入を防ぐことが行われた。[3] また疫病流行を終息させる方法として、吉祥悔過と牛頭天王修法とがならび行われた。吉祥悔過とは、毎年正月に最勝王経を読誦して、吉祥天に対して罪科をざんげして幸福をうけようとする行法であった。吉祥天は災害を除き幸福を授ける天部として信仰され、奈良時代後期には、その信仰が全国にひろがったという。天野信景はこれについて、牛頭天王は西域で

祭る神であり、薬師如来の教令輪身である。多くの病をことごとく除く功徳があるので、わが国では古くからその修法を伝え、疫病をはらい除くもので、吉祥天女悔過の法とならび行ってきて、ついに諸国に宣流し、諸方でこれをあがめ修めているが、みな仏教者の祭法である（『牛頭天王辨』）[4]と述べている。

二　牛頭天王とスサノオノミコト

観慶寺境内の天神堂すなわち天王祠堂は感神院ともよばれ、寺院とみられていたが、その後の推移を『二十二社註式』祇園社の条によってみると、天禄三（九七二）年、祇園社を日吉の末社にしたこと、天延二（九七四）年、感神院の延歴寺別院にしたこと、そして長徳元（九九五）年二月、祇園社を伊勢以下の二十社の列に加え、二十一社になったとある。天王祠堂は祇園社とも、感神院ともよばれたが、祇園社とよぶ場合は神社扱かいであり、神社と仏寺の二つの姿をもつようになったこと、神仏習合が進んできたことが知られる。祇園の名がつけられたのは、牛頭天王が祇園精舎の守護神と信じられたことによるものであろうか。

祇園社が二十社の列に加えられたことは、畿内有力神社のなかまに入ったことである。平安中期以後、朝廷が祈雨または止雨、あるいは祈年などの奉幣した伊勢神宮以下の神社は初め十六社であったが、逐次その数を増して祇園社が加えられて二十一社となり、ついで日吉社を加えて二十二社となった。これらの神社は朝廷の尊崇をうけ、高い社格をもつもののようにみなされ、一般民衆の信仰も厚かった。祇園社はとみにその霊験あらたかとの信仰を得て、これら一流神社の列に加えられたことは、名実ともに有力な神社となって社会的地位も向上したことを示すものである。

神社として扱われるようになったことは、神仏習合の進行すなわち牛頭天王とスサノオノミコトとの結びつき、両者の本地垂迹関係が定まってきたことの結果である。天野信景も、牛頭天王の祠堂は延喜（九〇一―二二）以前に建てられたものが多く、広峰・祇園・津島などがあるが、延喜式制定に際してこれら祠堂は神名帳にのせていない。もしスサノオノミコトをまつったならば除くわけはない。また祇園社に神階がないということはわが国の神ではないからであろう。といい、また、牛頭天王の祭祀は、もともと仏教徒がまつって祈禱したもの・修法であったが、後世になってスサノオノミコトを配して神社になったので、朝廷も礼遇して二十二社に列した、と述べている（牛頭天王辨）。天王とスサノオノミコトとの本地垂迹関係が定まり、両者を一体とする信仰が成立していったのは、祇園社が神社扱かいをされていった経過からみて十世紀中ごろと思われる。

天王とスサノオノミコトが如何なる因縁で結びつけられたか。十分な説明はできないが、両者の共通性として、天王は疫神として恐

るべき神と考えられ、その姿は怒髪憤怒の相をもって作られている。[5] スサノオノミコトも所行乱暴のため高天原を追放された荒ぶる神であり、両者とも荒々しい神であった。また天王も朝鮮との縁が深く、牛頭は朝鮮語ソンモリの訳という一説もある。スサノオノミコトも朝鮮と関係があるようで、『日本書紀』上・宝剣出現の段の一書によると、高天原を追放されてから、新羅にいてそれから山陰に来たとある。鳥取県大田市附近には、新羅から渡来してきたという伝説に応ずるような神社や遺跡が多いという。[6] 前述したように『八坂郷鎮座大神之記』には、新羅牛頭山のスサノオの荒御魂を八坂の地にうつしたものが祇園社の初めである、と述べている。さらにまた、両者を結びつける役割をしたものに「蘇民将来」の伝説がある。この伝説は『釈日本紀』の引く『備後国風土記逸文』に「疫隅神社縁起」として述げられているもので、次のような物語である。北海の武塔神が南海の神のむすめと結婚をするため旅にでて日が暮れた、そこに蘇民将来と巨旦将来の兄弟がいたが、富裕な弟巨旦は宿をことわり、貧しい兄蘇民が宿をかしてもてなした、年をへて武塔神は八柱の子をつれて帰る途中、蘇民の家にとまり、蘇民一家以外はことごとく殺し、われは速須佐能雄神なり、後世疫病がはやったならば、蘇民将来の子孫なり、と唱え、茅の輪をつけて免れよ、といったというものである。

『備後国風土記逸文』は一般に延長（九二三―三〇）の間の撰といわれており、天野信景は、風土記はみな土俗の伝説を記しているが、ところどころに中国・インドその他異国の故事を附会しているので、それらを無条件にわが神代の事と信じてはならないといい、また疫隅社は備後国鞆の浦にあって、俗に鞆の天王社といっており、武塔天王が南海の神女に通った地と伝えている、と述べている（『牛頭天王辨』）。平田篤胤は、この物語は古伝とは聞いているが、将来兄弟の名も異様であり、ことごとくは信じ難いが、備後国深津郡にある須佐能遠能神社は疫隅社と符合するので、すべてがでたらめでもないようである。伝説の内容を考えるとスサノオノミコトが高天原を追われてから、苦労して旅をした時のことであろう、と言っている（『牛頭天王暦神辨』）。志賀剛氏は、この話は朝鮮からの帰化人がもたらした原話に、朝鮮のソシモリから帰ったスサノオの神を武塔神にかえ、六月みそかの日に行われる夏越の祓に使用する茅の輪で疫病を払うべし、という日本の民俗を附加して作ったものである、と述べている（「日本における疫神信仰の形成―蘇民将来と八坂神社の祭神研究」―『神道史研究』二九―三）。貧しいけれど情のある者が困った旅人に宿をかし、心のこもったもてなしをしたので果報が与えられたという物語はほかにもあるが、蘇民伝説は、疫病流行に際してこれを免れる呪文、呪物など呪法の由来を説いている所に特色がある。

八坂祇園社はこの伝説をとり入れ、疫神という共通性を媒介とし

て、スサノオノミコトと牛頭天王とを結びつけようとして動いたようである。『二十二社註式』祇園社の条の終りに、『神社本縁起』にいうとして蘇民伝説を述べている。これはこの物語を八坂祇園社の縁起説話の一つとして、武塔神＝スサノオノ神を牛頭天王に結びつけようとする意図があったと思われる。『祇園牛頭天王縁起』（『続群書類従』第五十五所収）は、この動きをさらに進めて蘇民伝説をとりあげ、まず武塔大王の太子たる牛頭天王が、大海中の沙渇羅竜王のむすめ婆利妥（ばりさい）王女と結婚するため旅にでた、として、武塔神のかわりに牛頭天王となり、スサノオノミコトと天王との結びつきが進められ、両者一体の信仰ができ全国にも流布していった。

上述のような経過からみて、疫病流行から免れるため、蘇民将来の子孫と唱え茅の輪をつける呪文と呪物が、天王信仰にとりいれられたのは当然の成行きである。津島天王社では、白楊を削った札をつくり、これに「蘇民将来子孫門戸」と書いて疫病よけの護符とし、京都祇園社でも「蘇民将来子孫也」の七字を書いた札をつくり、疫病とくにほうそう、・はしかの流行時にこれをつけた（『牛頭天王辨』楊札の条）。阿刀田令造氏は、東北地方における蘇民将来信仰に関する行事・護符などについて多くの事例を紹介している。そしてなお、東北地方以外でも、京都祇園の末社に蘇民社があり、ここで蘇民将来の子孫と書いた木のまもり札を出していること、神戸市平野にある祇園社でもこれと同じまもり札をだしていること、三重県五十鈴川近くの松下神社は、前は「松下の天王」または「蘇民神祠」とよばれ、蘇民将来と書いた桃符をつくってくばったこと、を述べている（「蘇民将来上・下」『東北文化研究』一―四・五）。埼玉県飯能在の通称竹寺には神仏習合の形態を残すという奥の祠堂があり、これは牛頭天王をまつるものであるが、その堂前の左右に小さな角柱が立っており、それにはわずかに蘇民将来子孫と判読できる文字が残っている。

蘇民将来にかゝわる行事には、旧暦五月はじめに、その年の災害を除き豊作を祈願するものが多い。長野県上田市国分寺八日堂では旧正月八日の縁日に、やなぎを六角形に削り「大福長者蘇民将来子孫也」と書いて、除災招福のまもり札としてわけている。岩手県水沢の黒石寺では、旧正月七日に「蘇民祭り」を行なう。これは夜半から明け方まで除災豊作を祈願してごまをたき、それから本堂の本尊薬師如来の前におかれた「蘇民袋」を蘇民将来の三度の叫び声を合図に、本堂前に集まっている多勢のはだかの若者たちに投げいれる、若者たちがこれを奪いあってもみあい、最後につかみとった者の住居の地域が豊作多福があると信じられた年うらないの「はだか祭り」である。これらの行事は薬師如来と結びつけられているが、これは薬師如来が牛頭天王の本地と考えられていることによるものであろう。また岡山県西大寺の会陽（えよう）をはじめ、旧正月はじめの寒夜にいくつかの地域で、はだかの若者たちが神物を奪いあえはだか祭

りがあるが、これらは蘇民信仰となにか関係があるのだろうか。また岩手県東磐井郡川崎村の弥栄神社では、旧暦六月十五日に天王祭りを行なうが、この夜「おハト取り」といって、木製のハトの争奪が行われ、豊作についての神意をうらない、豊作の祈願をするという。この「おハト取り」も蘇民祭りと同じような要素をもっており、蘇民祭りが天王祭りに合体したものであろうか。

三　各地の天王社とその祭礼

平定時代にはいると疫病流行を怨霊のたたりによるとして、これを慰めやわらげる御霊会が行われた。『三代実録』清和天皇貞観五（八六三）年五月二十日の条には、神泉苑で行われた御霊会について詳しい記事がある。記事の前段は、六柱の怨霊の祭壇が設けられ、経文読誦のほか、奏楽・演舞・雑伎・散楽の余興が行われ、苑の四門を開いて民衆の観覧を許したという、当日の盛況を述べている。記事の後段は御霊会について註釈をして、御霊会は京畿から地方にひろがり、毎年夏から秋のはじめにかけて催され、仏を礼拝し経文を講説し、余興に歌舞が演ぜられている、と説明している。地方では、政治権力の争いに関係することはなかったので、中央の支配者層がもっているような特定の怨霊に対する畏怖の感情は少なかったであろうから、祭祀の対象は疫神とか悪霊とかいうようなものであったろう。京都でも次第に怨霊は過去のもの、歴史上の存在となり、御霊会は疫神に対して疫病防除を祈る祭礼となっていった。[7] このころの牛頭天王について村山修一氏は、「円如が神殿に安置した天神・婆利・八王子の三神とは牛頭天王（武塔天神）その眷族神である婆利妥女天王と八王子をさすもので、祇園天神堂の天神はこの時代すでに天神＝雷神＝御霊として考えられていたことはいうまでもなく、したがって牛頭天王はすでに御霊的疫神として知られていたのである」とも述べている（「祇園社の御霊神的発展」『本地垂迹』九四頁）。天野信景は「御霊会は冤魂悪霊が病気をもたらしてたたりをするので、その霊をまつって慰めるものである。牛頭神は疫病の神王であるから、疫病流行の時これをまつってその神霊を慰めるものである」と註釈し、なおまた八坂祇園社の御霊会を説明したあとに「諸州の天王社はこれにならい、季夏（旧暦六月の異名―筆者註―）に祭祀を行なう、これは六月祓（みなづきばらえ）の余風である。今諸方ではやし、おどりで祭礼をもよおす、これを祇園会という」と註解している（『牛頭天王辨』）。御霊会は特定の怒霊を対象とする祭礼から、疫病防除のために疫神牛頭天王に対する祭礼となり、旧六月に行われるようになった。地方でも疫病流行を終らせるため、また流行を防ぐため天王をまつることがひろがり、各地に天王社がたてられたが、その多くは八坂祇園社の牛頭天王を勧請したようである。鎌倉市大町字北側にある八雲神社は、もとは天王、松堂祇園社または松殿山祇園天王社などとよばれていた。この社は、新羅三郎義光が後

三年の役で苦戦している兄義家を助けるため、奥州下向の途中この地を通り、たまたま悪疫の流行をみて、八坂祇園社を勧請したのがはじめである、と伝えられている（昭和三四『鎌倉市史』社寺編）。真偽はともかく、このような伝説があるということは、この社の創始はかなり古いものと思われる。『鎌倉市史』社寺編によってかぞえると、鎌倉には牛頭天王をまつった社は六つほどあり、現在は祭神はスサノオノミコトであり、社名も改められ、四社は「八雲神社」といっている。この社名はスサノオノミコトと縁の深い出雲の枕詞からとったものと思われ、諸国の天王社には八雲神社と改名したものがかなり多いようである。大町字北側の八雲神社所有の文書中に、天正十四年六月十二日付の北条氏直が鎌倉代官に下した、鎌倉祇園祭において、けんか・口論・押売・ろうぜきを厳禁した制令がある（『鎌倉市史』史料編第一、八雲神社文書）。この禁制によって、同社の祭礼は禁制の日付からみて六月中旬に行われて鎌倉祇園祭とよばれたこと、近郷の諸地域から多勢人出があってにぎやかであり、それにともなっておこる事件も多かったことが知られる。栃木県鹿沼市には、天王社は境内社としては十二、独立の社は三つあり、その一つ深津の八坂神社の由緒は、創立の年代は非常に古く詳しくは分らないが、往古より深津郷の産土神として鎮座し、民衆の信仰していた古い神社である。社伝によると養老五（七二一）年、備後国深津郡に鎮座する須佐能遠能神社を勧請したという（昭和四二『鹿沼市史』前編第六章、神社・寺院五九七頁）。かなり古くからまつられていたことは確かであろう。そして天王社は八坂祇園社を勧請したものが多いのであるが、これは平田篤胤が蘇民伝説の疫隅社と符合するといった備後深津郡の須佐能遠能神社を勧請している。地名も同じ深津というのも偶然ではなかろう。この神社には、天王信仰と蘇民伝説との結びつきをもの語るようなものがあったであろう。『甲斐国志』巻五五～七二神祇部には、天王社を七つあげている。その中の元紺屋町にある「牛頭天王」について、別当ハ当山修験祇園寺、と記している。この祇園寺は同書巻九一修験部にある祇園寺が名称からも所在地からみても同じものである。修験部の祇園寺について、「号ハ清光山峯本院、武田ノ時ツツジヶ崎ノ城南ニ牛頭天王ノ社ヲ造営シ、峯本院ヲシテ其祀ヲ司ラシム」と説明している。神仏習合の形態がみられる。

天王社は疫病流行を終息させ、できれば疫病の発生を防ぐことを目的として、疫神牛頭天王をまつったものである。昭和五二『上都賀郡史』一第二編第四章、社寺及び宗教によると、栃木県日光町西町の八坂神社は、「尾張国津島町に鎮座せられた牛頭天王の霊をこの地に奉遷（年代不詳）し、社殿を建てみこしを担ぎ市中を巡った。霊験があって悪疫が止んだ。これによって西町全体のものが信仰して今日に至り、明治二年八坂神社とよんだ。それ以前は天王様とよんだ」（二七九頁）。また鹿沼町下府の八坂神社については、「明治十

八年コレラ病が流行、その時よりまつり崇拝したのに始まる」とある（一六四頁）。明治十八年ごろも、天王は疫病流行を終息せしむる功験ありと信ぜられたようである。また加蘇村の八坂神社について、「毎年三月八日をもって、つじ切りと称して、上久我・南摩・引田・加園の通路に当る境界線に疫病除を行い、六月十五日に祭典を行い、旧八月十五日にはみこしの渡御がある」と記している（二八二頁）。『鹿沼市史』前編第六章神社・寺院の八坂神社（下久我字沢河原）にもこれと同じ内容の記事があり、「辻切」と記している。つじ（辻）切とは、疫神の集落侵入を防止する行事、道饗（みあえ）の祭りに類するものであり、堀一郎氏が「疫神祭とは、現実の流行に先立って疫神を道に迎え、神を饗応してわが土地への侵入の意志を未然に防遏するためのものであり」（「疫神遊行と道饗、疫神祭」『我が国民俗信仰史の研究』一、六九六頁）と述べている所の疫神祭であると思う。

祇園、天王祭りは疫病よけのためのものであったが、科学思想・医学の進んだ今日では、祭りの趣旨が忘れさられることが多くなったのは当然であるが、まだ本来のすがたを残す行事が一部の地域にみられる。静岡県東伊豆の稲取では、スサノオ神社の祭日である七月十五日、面をかぶった人が持っている棒を見物人につけると、病気を防げると伝えている。埼玉県北葛飾郡の鷲宮神社の「天王さま」とよばれる祭りは七月下旬に行われ、この日各家庭にひとがた（人形）とよぶ紙がくばられる。各家庭ではこれに家族の名前を書いて神社に持参し、神社ではまとめて箱にいれ、天王さまの行列とともに町内をねり歩き、古利根川に流して無病を祈願するという。これは、罪・けがれを「はらえつもの」に負わせて他所に送るまじない儀礼も同じすがたである。

祇園・天王祭りには、みこしとだしがでる。古代の人々は、神は祭りの日に高い木によるものと信じ、この際御神木をひきまわす行事がおこった。この際御神木を手にささげ持つことから、二本の棒につけてかつぐようになり、これからみこしになったという。祭礼にあたって、まず御霊代（みたましろ）をみこしに移す「みたまうつし」の儀式を行なうことが多いので、みこしを天王さまとよんだのも自然のことである。そして牛頭天王もスサノオノミコトも荒ぶる神と信仰されていたので、みこしを荒々しくもみ、それが神意にかなうと考えるようになった。千葉県松戸市神明神社では七月十五日から二十日まで「天王さま祭り」があり、みこしをて荒くもむ。埼玉県羽生市では七月の七・八・九日が「天王さま」の祭日であり、天王さまは大あばれするほど喜ぶと信じている。（昭和五十）『越谷市史』第十章、宗教生活一一八八頁に、埼玉県越谷市に天王社を四つあげ、「天王は正しくは牛頭天王で、京都の祇園や尾張の津島を本社とする水神ないしは除疫神であり、利根川一帯にはこの天王を神興に納れ奉って、旧暦六月（現在は新暦七月）中頃に町々村々をかつぎ廻る（荒れみこ

しなどといわれることが多い）習慣が、これも近世・近代を通じてさかんである」と記している。また神のよるという御神木を車をつけたものをだし（山車）とよび、のちには神木の代りに人形をのせるものもできた。だしに屋根をつけるようになって屋台ともいい、祭礼のはやしやおどりをのせてひきまわすようになった。埼玉県久喜市本町の千勝神社の祭礼は「天王さま」とよばれ、各町内ごとにだしをひきまわすが、だしには神々の人形をのせ、病気予防、豊作を祈願するという。京都の祇園では、風流が不可欠のものであり、風流とはいろいろの人形・飾りもの、いわゆる「作りもの」に意匠をこらすことであって、それが山鉾にまで発展したという。[8] このため、現在では山鉾巡幸が祭礼の中心となっているようであるが、もとはみこしの巡幸が主であったようである。[9] 成田山新勝寺でも、薬師如来の垂迹という牛頭天王を供養する祭りが七月七～九日に行われ、これを祇園会とよんでいる。今では成田市をあげての行事となり、よびものはみこし・だしであり、九日夕刻から本堂前ではやしの競演が行われる。

昭和五四『大田市史』史料編・近世三七八頁に、年次はないが六月十二日の日付けの「：然者例年之通来ル十八日当町祇園祭礼御座候間…」という祇園祭礼の招待状がある。祇園・天王祭りは、疫病流行期にあたる旧暦六月、現在では七月に行われるのが普通である。この時期は種まきから田植えまで、ほねのおれた農作業が一段落したころでもある。祭礼を迎えてほね休めをし、かねて親類縁者を招いて親交を深め、祭礼を楽しんだのも、農村における祇園祭りの一風物詩でもあった。

註(1) 久保田収『八坂神社の研究』三〇―四二頁、祇園社の創始についての多くの諸説をあげている

(2) 松前健氏は、八坂祇園社のもとの祭神は八坂の地にいた朝鮮からの渡来人の奉じていた竜蛇神・水神であったという（祇園牛頭天王社の創建と天王信仰の源流」『角田博士古稀記念古代史論叢』）

(3) 『続日本紀』宝亀元年六月甲寅・同五年四月乙卯・同六年六月甲辰・同六年八月癸未・同八年二月庚寅の各条。

(4) 内閣文庫蔵『牛頭天王暦神辨』附。宝永改元秋分の自序があり、原文は漢文である。

⑤ 村山修一『本地垂迹』一〇三頁。

(6) 桜井貞光「古代石見の神々」（『歴史手帖』八―一〇）

(7) 「一般民間の御霊会には、必ずしもかような特定の怨霊のみがその対象となったわけではなく、むしろその本体がなにものかわからないところのあるものであったと考えられる」（柴田実「祇園御霊会～その成立と意義～」『中世庶民信仰の研究』一一四頁）

(8) 柴田実『中世庶民信仰の研究』一一八頁。

(9) 『大日本史料』第七編之三、応永六年六月十四日　祇園御霊会所引の『迎陽記』に、六月七日、丙午、晴、祇園会也、神興御出、為御見物、室町殿（義満）渡御京極大膳大夫入道宿所、…十四日、癸丑、晴、祇園神輿還幸也。今日、室町殿御出京極入道桟敷。…とあり、みこし巡幸が祭礼の中心であったようである。